

安東次男

時分花

朝日新聞社

時分の花 奥付

昭和五十四年三月三十日第一刷発行 著者安東次男 発行者藤田雄
三 発行所朝日新聞社 東京都千代田区有楽町二丁目六番一号 東京
二二二局〇一三一番(代表) 印刷所図書印刷株式会社 定価二千円

©1979 Tsuguo Ando 0095-254635-0042

時分の花
目次

連句作法	三
恋は歌仙の花	六
言葉の考えかた	一〇三
時分の花	一〇七
歌仙始末	二九
妙心寺界限	三四
秘木	三六
東大寺覚書	四三
もう一つの東大寺	五二
雪景の印象——岡鹿之助	五五
言残したこと	五三

熊谷守一の自然体

素描家の条件

壺の話

灰被ぎと塗土

桃山の茶陶

文房具の小径

青花の今昔

二つの壺

ちいさな履歴

闖入者

雪のゆふぐれ

二〇七

二〇三

二〇四

二〇三

二〇二

二〇五

二〇六

二〇六

二〇〇

二〇五

二〇〇

時
分
の
花

連句作法

作品 夷講の巻（元禄七年六月二十八日奥付板、志田野坡・小泉孤屋・池田利牛共編『炭俵』所収）

一卷興行の

時 元禄六年十月二十日

所 江戸深川

連衆 芭蕉五十歳・野坡三十二歳・孤屋・利牛

神無月廿日、ふか川にて即興

振賣の鴈がんあはれ也（え）ゑびす講

芭蕉

発句(立句ともいう)。季・初冬(夷講)。

十月二十日をとくに講日と定め、取引先や縁者を呼んで祝い事をし、あるいは上方のようにこの前後にかけて誓文払をする商家の風習がある。恵比須信仰の起りは古いが、夷講は江戸開府以後にはじまった行事である。

連句発端の句は賓客・宗匠のつとめるものとされ、それが内々の稽古であって客の設けなどとくにしなないばあいでも座に主客の弁えは自ずとあるべきだから、発句には当季・当座を詠んで挨拶とするという約束がある。

句の「神無月廿日、ふか川にて即興」という前書ならびに「ゑびす講」は、まずそういうことを示している。

現行の芭蕉句集を開いてみると、元禄六年の条に右の形でこの句を収めているけれども、夷講といえは神無月二十日はわかりきったことだし、この時期芭蕉は深川に住んでいたから(五年五月ごろから七年五月まで)、前書は余分に見える。したがって、何か特別の興がこの前書には含まれている、と読むことができる。それは、深川でなければこの句の面白みは無いということだろう。それから、句が単独でなく連句の発句であれば、当日の興行の在り様もしくは連衆の性格に、かわりがあるのかもしれないということだ。

野坡・孤屋・利牛は、伝えによればいずれも両替商越後屋（三井の前身）の手代だった。したがって当日は、休業をさいわい、駿河町から隅田川を越えてやってきたわけだ。

句の表情はそのあたりから見えてくる。芭蕉が夷講という季語を取出したのも、野坡たちに対する挨拶としてよく利くからで、かりにこの日の連衆が算盤を以て立つ商人でなく、去来とか凡兆とか許六とかいう人たちであったなら、たとえ神無月二十日の興行でも、芭蕉は夷講の句など作らなかつたかもしれない、ということには注意しておく必要がある。発句作者としてあるべき心構で、席入の微妙かつ面白い点である。

会は芭蕉庵をかりて持たれたものと思うが（それとも野坡たちが深川のどこぞに席を設けたか）、芭蕉は、今日は君たち商人が縁起を祝う日だから、鯛はさぞかし売れるだろうが、振売の雁など見向もされなからう、しかしわが仮住居のここ深川あたりでは、その振売の雁がかえって風情になる、と告げているのだらう。商家の縁起物に渡りや借・仮の連想は嫌われる、ということにも気をくばって軽妙に言掛けている。

当時の深川は殆ど寺と下屋敷で占められていて、町割もろくにできていなかったから、夷講の賑いには縁がなかったはずだ。そういう場所に、市中を避けた振売が雁を提げて現れたことに、芭蕉はいたく興を刺激されている。たまたま振売の姿を見かけたとか、呼び

あるく声を耳に留めたとか考えてもよし、また他日のそうした経験を思出して即席の句作りとしたと考えてもよい。その辺はどちらでもよいが、夷講の日の深川ならでは得られぬこの情緒を味ってほしいと言うのは、相手が市中から抜け出して来た商人だからこそ利く。この句は、一般に、賑いの日をあてこんで市中を振売される禽鳥のあわれさを詠んだ句だ、と情緒的に解されているが、そうではあるまい。前書はもとより、句の「あはれ也」も全くの蛇足になってしまふ。

発句は一卷のはじめであるから、句姿つよく俳意たしかに作るべきことは勿論だが、句中にテニヲハ一つといえども曲節があり、余意余情を充分に含んでいなければ、立つことはできない。そういうことを百も承知していた芭蕉が、夷講という季に振売の雁を取合せれば余情は「あはれ」の一語に尽きるのに、なぜわざわざ駄目押の五文字を裁入れたのか、というところに考え及ばなければ、句はよくよくの不出来に見えるはずだ。

夷講が開府以後の風習だとは先にも述べたが、歳時記の初見もそれに合せて正保二年の『毛吹草』（松江重頼）で、夷講は俳諧がはじめて取上げた季語である。連歌時代にはまだ無かった。一方、振売という行商の形態も、呼称は既に室町時代に見えるが、盛行は江戸に入ってからで、將軍家綱のころには年齢等に制限を設け、次いで新規の振売を禁止する

までに至っている。

芭蕉は、そうした当世風俗の二様に目を留め、行商人が呼びながら提売^{ていばい}してあるくものがこともあろうに雁だ、というところまで素材取合せの趣向を拈^ひげている。これは前代未聞の新奇さで、それだけでも俳意は充分に現れる。雁が古来、渡りの風情とりわけ鳴声を物思いのたねとして、秋及び春に部類され、カリという訓もその鳴声から生れたことは、わざわざ言う必要もない。食用などを詠む鳥ではないのだ。ましてや、振売と結んで遣うというようなことは、和歌でいえば主あるものとして後人の使用を禁じた制詞のたぐいで、芭蕉自身も二度と遣ってはいない。

芭蕉が夷講の日の振売の雁を敢て「あはれ也」と言ったのは、最も伝統的な感動詞が秘める和歌でも連歌でもない貌を、いろいろに取出してみたい興に駆られたからだと思う。「あはれ」は秋声を絶たれ、振られ、深川まで引回され、独坐の思念のなかに引据えられて、しまいに連衆の座に投出される。共に考えよう、と誘うこの孤心の宥め様はうまい。一見、ありのまま上から詠み下されたように見えるが、「あはれ也」はしたたかに据えられた句眼である。

因にこの句を、「振売の雁のあはれや、夷講」、「振売の雁あはれなる、夷講」、あるいは「夷

講」を初句切として「夷講振らるゝ雁のあはれなり」などと作り替えてみれば、句調の弱さは別にしても、「あはれ」の句ではなくなってしまう。まだしも「夷講振らるゝ雁のあはれなる」とでも作れば、多少の心は現れるだろうが、それとて余情の浅さは蔽うべくもあるまい。原句の曲節は意外に平凡かつ微妙なところにある。

なお、この句の雁の読を、素牛（惟然）撰『藤の実』（元禄七年）には「雁ン」として伝え、別にガンと振仮名を施して出す芭蕉書簡の写しも伝存している。素牛の撰集は、師翁生存中のものだ。芭蕉自身、伝統を憚りこの日の連衆を考えて、ガンと読ませたのではあるまいか。

振賣の鴈あはれ也ゑびす講

降^{くだ}てはやすみ時雨する軒

野 坡

脇句。季・初冬兼三冬（時雨）。

連歌師里村紹巴の『連歌教訓』に、「発句は客人、脇は亭主の心持也」とあり、同じく『至宝抄』に、「脇の句の事、よく発句の心をうけて、其時節背かぬ様に一かどさはやかに

可_レ被_レ遊候」とある。俳諧でもこのことは変りなく、「脇、亭主の句のいへる所、即挨拶也」、「ほ句をうけて、つり合專にうち添て付るよし」と『三冊子』に芭蕉のことばを伝え、『宇陀法師』にも「脇は発句に残したる言外の意味を請て継也」と言っている。

当然、脇は発句と同季に作らなければならないが、一つの季の初・仲・晩までが一致しなければならぬわけではない。初冬の発句を承けて脇が仲・晩冬に余情をさぐることもあるだろう。しかしこの巻のように、発句の季が初冬（神無月二十日）に限られているばあいは、季の余情も自ずと限られてくる。

野坡は、神無月が一名時雨月とも呼ばれることに着目して、季の用を取出しているが、その時雨が初冬を本来とし合せて三冬にわたって遣われる、というところが次句を継ぐ人にのこしたうまみだ。句は、発句が人事のなかに景もうかんでくるさまに作っているから、その場を見定めて二句一意になるように添うている。

作の設けは、「降てはやすみ」だろう。「降りみ降らずみ」ということばがある。『後撰集』冬の部に、「神無月ふりみふらずみさだめなき時雨ぞ冬のはじめなりける」という読人しらずがあり、そこから生れたことばだが、野坡の工夫はそれの俳諧化だ。「あはれ」も本来歌語であり、発句の「あはれ也」はその俳諧化だと読取ったからこそ、「降りみ降ら

ずみ」から「降てはやすみ」が生れてきたので、釣合という考は面白い詞を生む。ただ何となくその席の気分で思付いたわけではない。

いま一つ、野坡は、前句の振売にふさわしい「あはれ」とは、振っては休む人駄だと見ているのだろう。振・降の訓を通いにした気転には違ないが、発句が人事と景を表裏に裁てば脇は景と人事を表裏に裁つ、というところにこれまた余情・釣合の工夫がある。振売はただ休むのではなく、軒先で空模様をうかがっては通へ出てゆくらしい、ということろまで読取らせるから、ひるがえって時雨の降らせ様にもリズムが生れ一際あわれさを増す、という仕立の寸法だ。

脇句の仕様を五駄に分つ説がある。『連歌教訓』に、「脇に於て五つの様あり、一には相對付、二には打添付、三には違付、四には心付、五には比留り也」と挙げ、続けて「大方は打添て脇の句はなすべき也」と言っている。もともと脇とかぎらず、付合手法の基本として口伝されたものを、一卷初の心得としてとくに書留めたものだろう。

このうち、詞の縁や寄合によらず心で付ける心付は、手法とも言えず、心敬なども「心付ならぬ句あるべからず」と既に言っているから、脇の仕様はその後、心付を除く四つとされるのが一般である。さらに蕉風になると、前句の余情（句）を重んじる立場から、も

つばら打添の付をよしとするようになる。芭蕉も、「貞徳老人の云、脇躰四道あり、と立られ侍れども、当時は古く成て、景氣を言添たるを宜とす」（「初懷紙評註」）と言っている。蕉門の連句のなから、一、二の例を挙げておく。

炭賣（お）のをのがつまこそ黒からめ 重五

ひとの粧トヤサユひを鏡磨トヤサユ寒 荷兮

貞享元年冬の『冬の日』所収。発句を鏡磨のことばと見立て、炭売のことばで言返した問答だ。身に沁む渡世の二様を向合せた滑稽である。

秋風にふかれて赤し鳥の足 洒堂

臥てしらけし稻の穂の泥 諷竹

元禄七年九月の三つ物。「赤し」に「白けし」と応じている。第三の句は芭蕉が「駕籠かきも新酒の里を過兼て」と作り、大坂の門人洒堂しゃどう・諷竹の不和を、芭蕉が調停したとき
の三句だと容易にわかる。
これらは相対付である。